

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26540168

研究課題名（和文）子どもの読書への関心を高めるプログラムの実践と評価

研究課題名（英文）Practice and evaluation of programs for promoting preschoolers' interests in reading

研究代表者

鈴木 佳苗（Suzuki, Kanae）

筑波大学・図書館情報メディア系・准教授

研究者番号：60334570

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児を対象として「ぬいぐるみのおとまり会」のプログラムを検討し、実践と評価を行った。

従来のプログラムでは、子どもたちは初日にぬいぐるみと一緒におはなし会に参加してからぬいぐるみを図書館にあずけ、翌日以降におむかえに行くという構成が多かった。本研究では、ぬいぐるみを初日にあずかり、最終日にはおはなし会と参加者全員でのふりかえりを行い、ぬいぐるみが選んだ本と図書館での活動の写真を渡すというプログラムを提案し、公共図書館と幼稚園・保育園で実践を行った。保護者を対象としたプログラム評価の結果、評価は高く、また、幼児はぬいぐるみが選んだ絵本などに高い関心を示した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the construction of stuffed-animal sleepover programs, and implemented and evaluated the revised programs.

On the first day, most existing programs began with a story hour at a library, following which the children left stuffed animals at the library and picked them up the next day. However, in the revised programs for libraries, children simply brought their stuffed animals to the library and left them on the first day. On the final day, a story hour and slide show on how stuffed animals contributed and participated in activities at the library was conducted. At the end of the programs, children were given books as if their stuffed animals had selected them and a photo album of the stuffed animals' experiences at the library. The revised programs were implemented at the public library and at kindergartens or nursery schools. Most parents greatly evaluated the activities, stating that their children showed considerable interest in the books provided in the programs.

研究分野：図書館情報学、社会心理学

キーワード：ぬいぐるみおとまり会 読書興味 図書館への関心 幼児 プログラム評価

1. 研究開始当初の背景

「ぬいぐるみおとまり会」は、米国の図書館で始まり、日本でも実践が増えてきている。「ぬいぐるみおとまり会」のこれまでの実践では次のような実施方法が多く見られる(児童図書館研究会, 2012; Romriell, 2011; Stippich, 2012; Thompson, 2012)。まず、子どもたちはお気に入りのぬいぐるみと一緒におはなし会に参加する。その後、図書館がぬいぐるみをあずかり、ぬいぐるみが図書館を探検したり、本を読んだり、図書館で眠ったりする様子を写真撮影する。翌日、ぬいぐるみを迎えにきた子どもたちに写真を手渡し、ぬいぐるみが選んだ本として(図書館員が事前に選んだ)おすすめの本の貸し出しを行う。「ぬいぐるみおとまり会」では、お気に入りのぬいぐるみが選んだ本をその後読むことを通して本への関心が高まること、また、ぬいぐるみが図書館を探検したり、本を読んだりする様子を写真で見て、図書館への関心を高めることなどが期待されている。

このように、「ぬいぐるみおとまり会」には基本的な構成要素があるが、図書館でのより具体的な実践内容には違いが見られる。そのため、子どもの本や図書館への関心を高めるプログラム構成や、このプログラムを用いた実践の効果について検討を行うことは、今後の公共図書館での実践に貢献することができると考えられる。

また、この「ぬいぐるみおとまり会」は公共図書館のサービスとしてだけでなく、公共図書館と保育園・幼稚園が連携して実施していくことも可能であると考えられる。公共図書館で開催される行事に参加するのは絵本や図書館に行くことに関心の高い家庭の幼児であるが、保育園・幼稚園で実施すれば、絵本や図書館に行くことに関心の低い家庭の幼児も参加することが可能となり、地域の子どもを対象とした新しい取組としての展開が期待できる。

2. 研究の目的

本研究では、従来の「ぬいぐるみおとまり会」の公共図書館での実践を基に、子どもの本や図書館への関心を高めるプログラム構成を検討する。この「ぬいぐるみおとまり会」のプログラムを公共図書館と保育園で実施し、子どもの本や図書館への関心などへの効果を検討する。

3. 研究の方法

(1) プログラム構成の検討

文献調査に基づいて従来のプログラムの構成要素を抽出し、公共図書館員と共同でプログラム構成の検討を行った。

(2) プログラムの公共図書館での実践と評価

2014年7月に茨城県内の公共図書館で開催した「ぬいぐるみのおとまり会」の実践には17名、2015年7月に開催した活動には14名の幼児が参加した。申込者の特徴として、日頃の図書館でのおはなし会にあまり参加していない子どもが多かった。

「ぬいぐるみのおとまり会」の評価では、参加した幼児の保護者を対象として実施直後に質問紙調査を実施した。質問項目は、1)「ぬいぐるみのおとまり会」全体に対する評価(5件法)とその理由(自由記述)、2)「ぬいぐるみのおとまり会」のおはなし会の内容に対する評価(5件法)などであった。

(3) プログラムの幼稚園・保育園での実践と評価

(2)のプログラムを幼稚園・保育園の実践用に改訂し、2016年に茨城県内の幼稚園・保育園計5園に通う幼児96名を対象として、「ぬいぐるみのおとまり会」の実践と評価を行った。

「ぬいぐるみのおとまり会」への参加が幼児や保護者の読書や図書館への関心を高めるかを検討するために、「ぬいぐるみのおとまり会」の実施群と対照群を設定し、幼児の保護者に対してぬいぐるみをあずかる前(事前質問紙)、おはなし会の約4週間後(事後質問紙)に質問紙への回答を依頼した。質問項目は、事前質問紙と事後質問紙において、1)「幼児が図書館の話をする頻度」(4件法)、2)「保護者が図書館で幼児のために借りる本の冊数」(10件法)などについて尋ねた。また、おはなし会の実施直後には「ぬいぐるみのおとまり会」の感想についても尋ねた。

4. 研究成果

(1) プログラムの検討と提案

具体的には、従来の「ぬいぐるみのおとまり会」のプログラムの内容を次のように変更した。第1の変更点は、おはなし会を最初にぬいぐるみをあずかる日ではなく、ぬいぐるみを返す日に行うことであった。従来のプログラムでは、ぬいぐるみを返す日に、ぬいぐるみが選んだ本として数冊を子どもに渡している。しかし、おはなし会をぬいぐるみを返す日に行い、このおはなし会の準備をぬいぐるみが行ったと説明することにより、おはなし会自体への関心がより高まるのではないかと期待される。

第2の変更点は、おはなし会をぬいぐるみを返す日に行うことにより、本を選ぶだけでなく、図書館でおはなし会の準備をす

ることを含めて、ぬいぐるみが図書館にとまってさまざまな「図書館の仕事を手伝う」ことを子どもたちにより明確に伝えることであった。このような説明や、ぬいぐるみの図書館での仕事ぶりを記録した写真により、子どもたちは、本への関心だけでなく、図書館や図書館でのさまざまな仕事に対しての関心が高まるのではないかと期待される。

第3の変更点は、ふりかえりの重視であった。ぬいぐるみがおはなし会の準備をしたり、図書館のカウンター業務を手伝ったりなど、図書館でどのように過ごしたのかという過程を、写真のスライドショーで子どもたち全員でふりかえることにより、本や図書館への関心がより高まることが期待される。

以上の点を変更した「ぬいぐるみのおはなし会」の最終的なプログラムは次の通りである。まず、図書館がぬいぐるみをあずかり、翌日、スタッフが図書館内でのぬいぐるみの様子（図書館で仕事をする様子や本を選んだりする様子）を撮影する。そして、最終日には、子どもたちがお気に入りのぬいぐるみと一緒におはなし会に参加した後、子どもたちにぬいぐるみと、図書館での様子を撮影した写真などを手渡し、ぬいぐるみの選んだ本として、それぞれの子どもの好みを参考に図書館員が選んだ本を貸し出すという構成になっている。

2014年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」のおはなし会の内容は、絵本の読み聞かせ、パネルシアター、大型絵本の読み聞かせであった。また、2015年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」のおはなし会の内容は、2冊の絵本の読み聞かせ、紙芝居であった。

(2) プログラムの公共図書館での実践と評価

「ぬいぐるみのおはなし会」全体に対する評価とその理由について、保護者を対象とした質問紙調査の結果、2回の実践ともに今回の活動内容は高く評価されていた。2014年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」全体に対する評価については、有効回答者（14名）のうち13名（93%）が「1: よかった」と回答していた。また、2名が「2: どちらかといえばよかった」と回答していた。2015年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」全体に対する評価については、有効回答者（12名）のうち10名（83%）が「1: よかった」、1名が「2: どちらかといえばよかった」と回答していた。

この評価の理由としては、ふりかえり（写

真やスライドショー）、図書館へ来るきっかけ、家庭での読み聞かせの促進などがあげられており、今回の活動への参加が子どもたちの本や図書館とのかかわり方により影響を及ぼしていることが示唆された（表1、表2）。

「ぬいぐるみのおはなし会」として「ぬいぐるみのおはなし会」の内容については、保護者を対象とした質問紙調査の結果、2回の実践ともに高く評価されていた。2014年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」の内容については、有効回答者（13名）のうち10（77%）名が「1: よかった」、2名が「2: どちらかといえばよかった」と回答していた。2015年7月の「ぬいぐるみ

表1 2014年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」を高く評価した理由

高く評価した理由	具体的な記述例
プログラム内容がよかった	ぬいぐるみの本を選んでくれた／おはなし会をイキイキと聞いていた／写真がかわかった／スライドでぬいぐるみの仕事の様子が分かった、など
企画自体がよかった	夢のある企画／子どもの目線にあって考えられた企画／今までにない企画でよかった、など
本やぬいぐるみへの愛着が深まった	本への愛着が深まった／ぬいぐるみの図書館での仕事の様子を見て、今後ぬいぐるみをもっとかわいがりたい気がする、など
図書館に来るきっかけになった	今まで機会がなかったが、子どもを連れてくることのできてよかった、など
子どもの成長が実感できた	いつも一緒にいるぬいぐるみと離れて子どもが少し自立した気がする、など

表2 2014年7月の「ぬいぐるみのおはなし会」を高く評価した理由

高く評価した理由	具体的な記述例
プログラム内容がよかった	ぬいぐるみの本を選んでくれた／おはなし会の手遊びが初めての体験だった／子どもが写真を見て喜んでくれた／スライドショーでぬいぐるみが図書館でどのように過ごしたかが分かった、など
本を読むきっかけになった	本をもっと読む／読み聞かせをするきっかけになった
子どもの成長が実感できた	子どもなりに図書館の楽しみ方を見つけた、など
その他	おはなし会に参加して、子どもの読み聞かせの参考になった、ぬいぐるみへの愛着が深まった、など

のとしょかんおとまり会」のおはなし会の内容については、有効回答者(12名)のうち8(67%)名が「1: よかった」、4名が「2: どちらかといえばよかった」と回答していた。

(3)プログラムの幼稚園・保育園での実践と評価

2014年度および2015年度の公共図書館での実践と評価の結果に基づいて、従来のプログラムとは異なり、ぬいぐるみを幼稚園・保育園で初日にあずかり、ぬいぐるみを図書館に連れて行って写真撮影を行い、最終日におはなし会と参加者全員でのふりかえりを行い、ぬいぐるみが選んでくれた絵本やぬいぐるみが図書館で活動する写真を渡すというプログラムを実施した。

おはなし会直後の幼児の図書館への関心は全体的に低い傾向が見られた。このように、幼稚園や保育園での実践においては、ぬいぐるみの活動の場が図書館であることを幼児により分かりやすく伝える工夫が必要であることが示唆された。

事後質問紙と事前質問紙の差得点を分析した結果、保育園に通う幼児では、「ぬいぐるみのとしょかんおとまり会」の実施群のほうが保護者が図書館で幼児のために借りる本の冊数が多くなることなどが示された。また、「ぬいぐるみのとしょかんおとまり会」の感想の内容を分析した結果、幼児はぬいぐるみが選んだ絵本やぬいぐるみの写真に高い関心を示し、2014年度および2015年度の公共図書館での実践と同様の傾向が見られた。

<引用文献>

児童図書館研究会(2012)。「ぬいぐるみと
いっしょのおはなし会 & ぬいぐるみの
としょかんおとまり会」を実施して: 横
浜市磯子図書館の事例から こどもの図
書館 59(7), 2-3.

Romriell, D. (2011). When it rains stuffed
animals: A lesson in handling the
unexpected. *Children and Libraries: The
Journal of the Association for Library
Service to Children*, 9(1), 37-40.

Stippich, S. (2012). Kick start your
programming!: “The best of the best” library
ideas for school-age children. *Children and
Libraries: The Journal of the Association for
Library Service to Children*, 10(3), 55-56.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者
には下線)

[雑誌論文](計2件)

鈴木佳苗 (2016). ぬいぐるみのとしょか
んおとまり会のプログラムに対する評価:
図書館や読み聞かせへの態度に及ぼす影響
図書館情報メディア研究, 査読有, 14,
81-89.

Suzuki, K. (2015). Practice and evaluation
of a stuffed animal sleepover analysis of
children's reactions to picture books.
Proceedings of INTED2015 Conference, 査読
有, 2nd-4th March 2015, Madrid, Spain. ISBN:
978-84-606-5763-7, 7502-7508.

[学会発表](計1件)

Suzuki, K. (2015). Practice and evaluation
of a stuffed animal sleepover analysis of
children's reactions to picture books.
INTED2015 Conference, 2nd-4th March 2015,
Madrid, Spain.

[図書](計1件)

鈴木佳苗 (2018). 子どもとメディア 子
どもと図書館 児童図書館研究会(編)年
報こどもの図書館 2017年版 (pp.73-76) 日
本図書館協会

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 佳苗 (SUZUKI, Kanae)
筑波大学・図書館情報メディア系・准教授
研究者番号: 60334570